寺山修司展　―世田谷文学館コレクションにみる

2024年10月5日(土)～2025年3月30日(日)

＊会期途中に整備休館あり

【開館時間】10：00～18：00（入場とミュージアムショップは17：30まで）
【休館日】毎週月曜日（但、月曜が祝休日の場合は開館し、翌平日休館）、
　　年末年始（12月29日～1月3日）、館内整備期間（3月10日～18日）
【主催】世田谷区、公益財団法人せたがや文化財団　世田谷文学館
【後援】世田谷区教育委員会
【協力】(株)テラヤマ・ワールド

広報用貸し出し画像

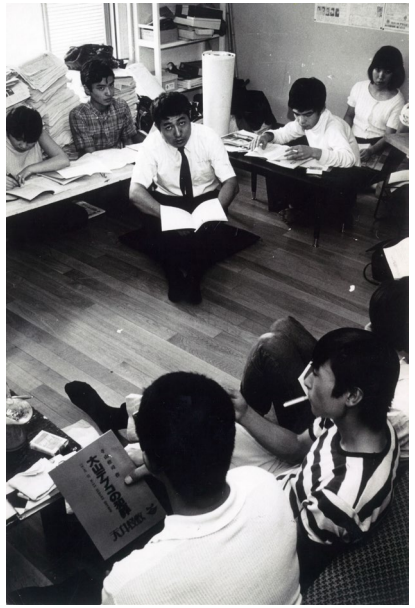
貸出条件
◆本展紹介記事をご掲載いただく際は、恐れ入りますが情報確認のため、掲載前に校正紙をお送りください
◆画像は展覧会紹介の目的のみにご使用ください
◆画像のトリミング、画像に文字を重ねるレイアウトはお控えください
◆画像データは、ご使用後必ず消去してください
◆画像データを第三者に渡すことを禁じます
◆画像にはコピーガードを施してください
◆©表記がある画像は、クレジットを必ず記載してください
◆画像のコピーガードができない、またはクレジット記載できない場合は、展覧会ポスターデータ（制作中）をお使いください
◆発行後、掲載誌を１部お送りください
◆貸し出しご希望の際は　webmaster@setabun.net　へご連絡ください

①われに五月を出版の頃（1957年）
©テラヤマ・ワールド

②早稲田大学入学直後（1954年）
©テラヤマ・ワールド

③世田谷区下馬の自室にて（1967年頃）
©テラヤマ・ワールド

④演劇実験室「天井桟敷」第一回公演ポスターの原画と（1967年頃・原画は横尾忠則）
©テラヤマ・ワールド

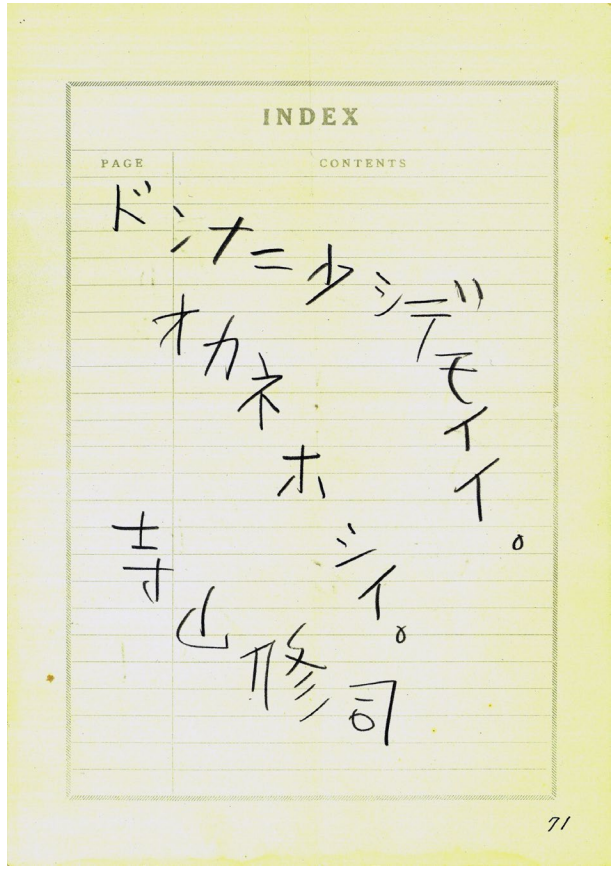


⑤『大山デブコの犯罪』の本
読み風景©テラヤマ・ワールド

⑥渋谷に落成した天井桟敷館の前で（1969年）
©テラヤマ・ワールド

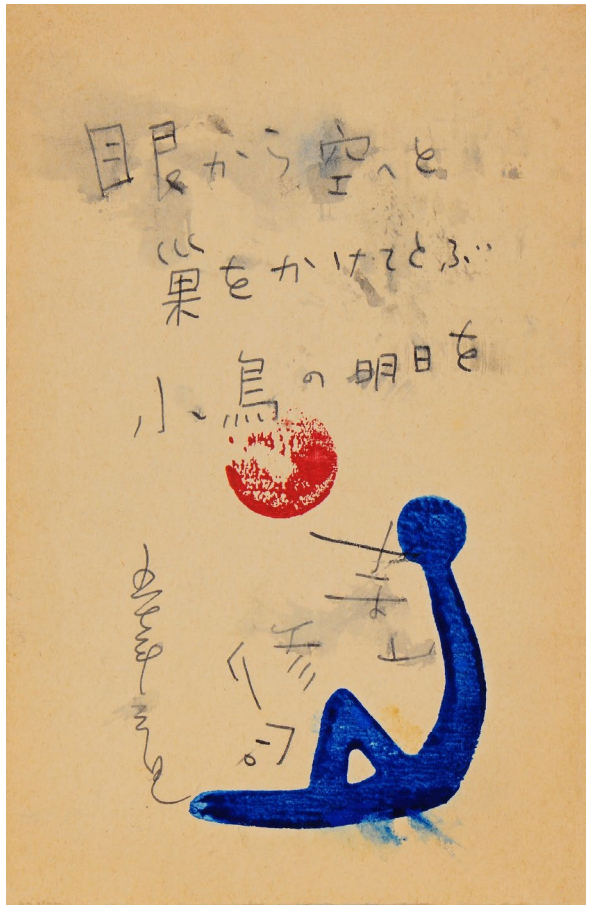
⑦ファイティングポーズをとる寺山修司
©テラヤマ・ワールド

⑧寺山修司
©テラヤマ・ワールド



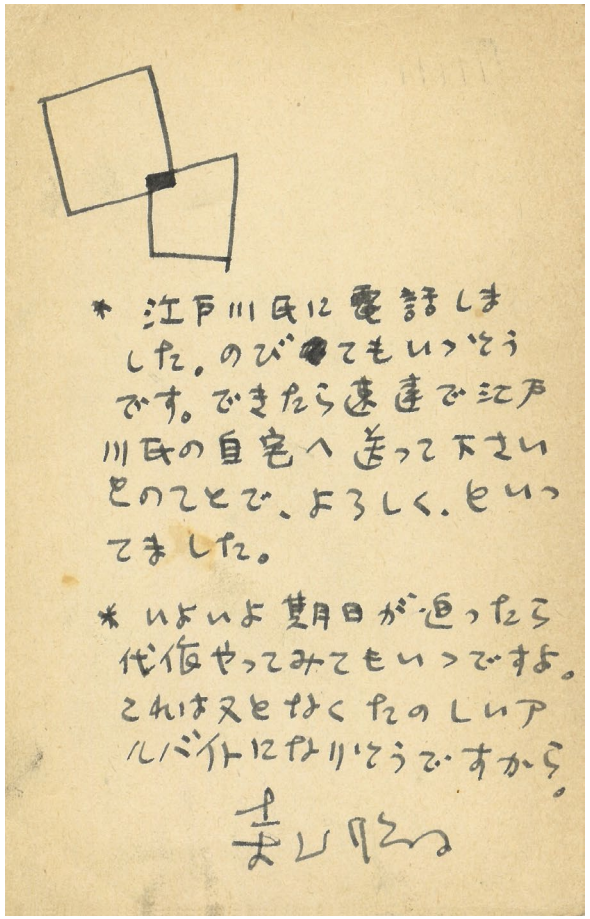
⑨寺山修司　中野トクあて書簡・複製
（1956年3月3日消印）　©テラヤマ・ワールド

中学校の国語教師へあてた手紙。直接の教え子ではなかったものの、中野は良き相談相手として思春期の寺山を支えた。



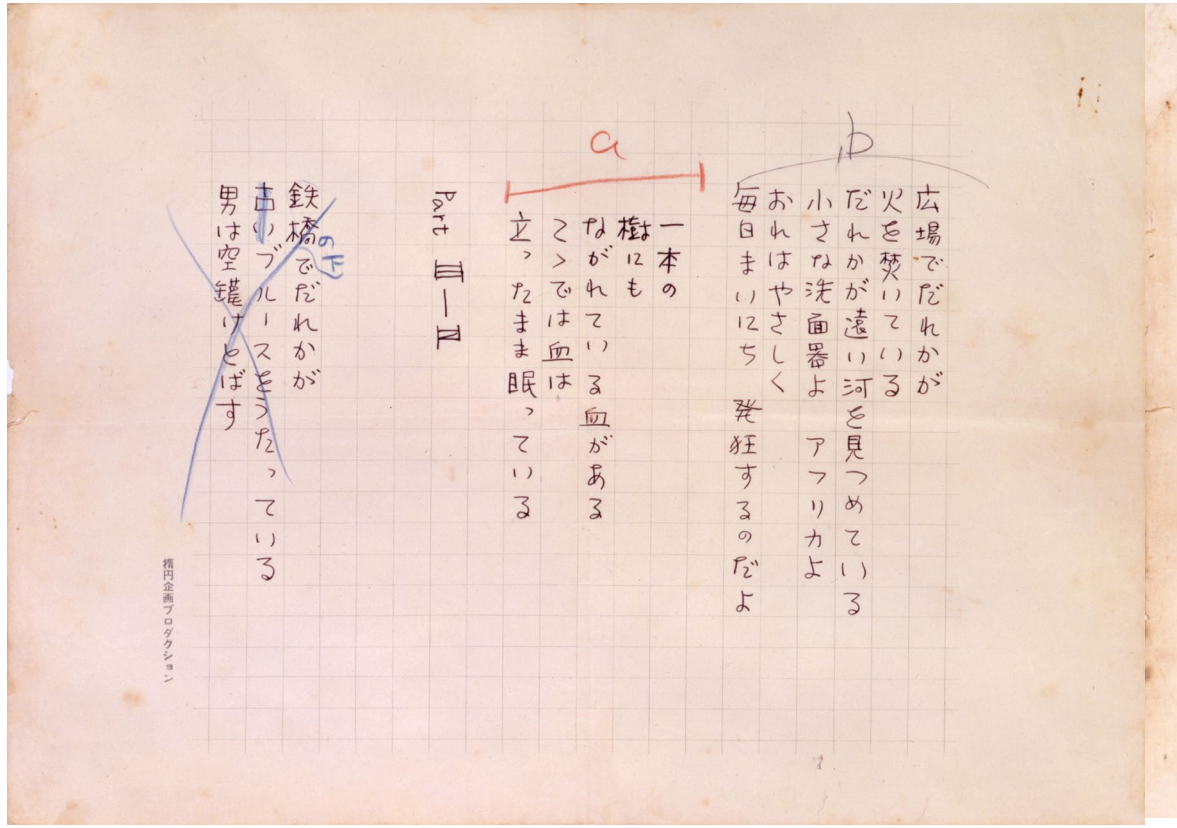
⑩寺山修司　松井牧歌あて年賀状・複製（1957年）
©テラヤマ・ワールド

「眼から空へと / 巣をかけてとぶ / 小鳥の明日を / 五十七年元旦 寺山修司」
「牧羊神」同人の友へあてた葉書。「牧羊神」は、寺山が全国の高校生に呼びかけて創刊した俳句誌。



⑪寺山修司　仁木悦子あて葉書（1958年7月15日消印）
©テラヤマ・ワールド

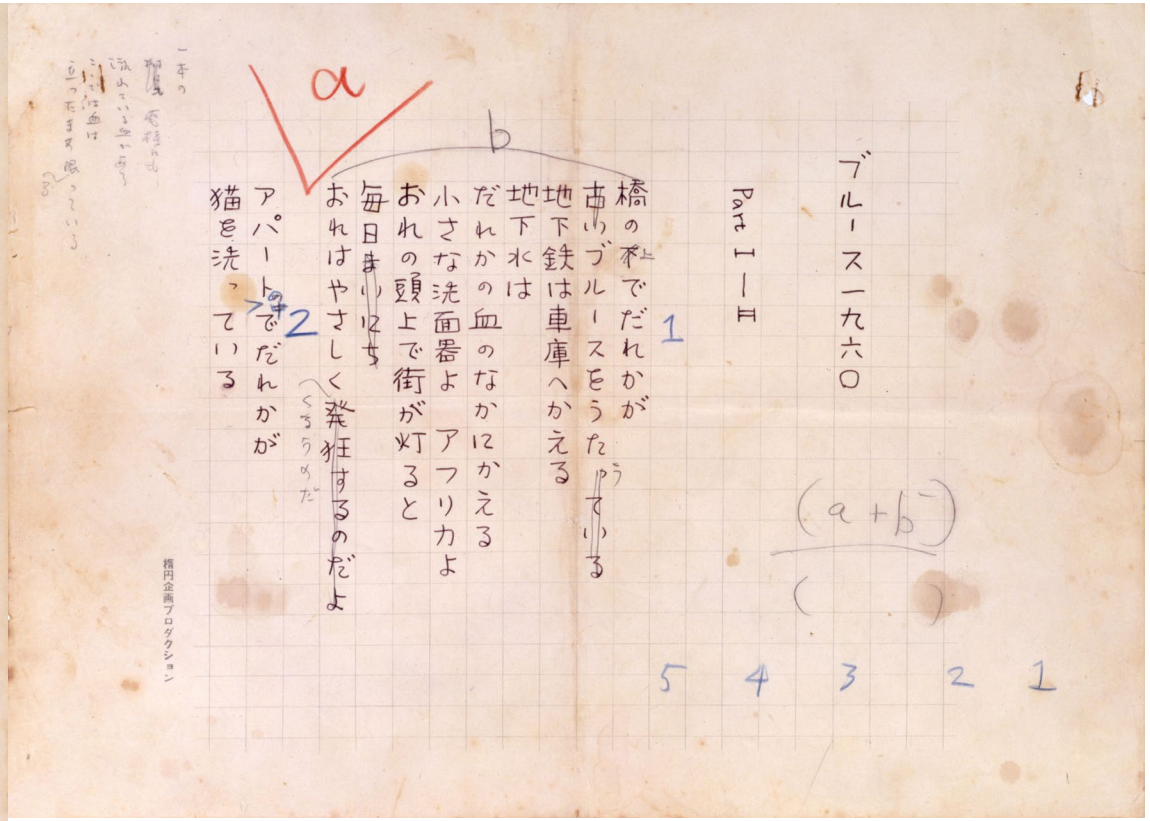
推理作家で童話作家の仁木へあてた葉書。「江戸川（乱歩）氏に電話しました。のびてもいゝそうです」と、締切に窮する仁木を思いやる言葉が並ぶ。



ブルース一九六〇

Part I—II

橋の下でだれかが
古いブルースをうたっている
地下鉄は車庫へかえる
地下水は
だれかの血のなかにかえる
小さな洗面器よ　アフリカよ
おれの頭上で街が灯ると
毎日まいにち
おれはやさしく発狂するのだよ
アパートのすみでだれかが
猫を洗っている



広場でだれかが
火を焚いている
だれかが遠い河を見つめている
小さな洗面器よ　アフリカよ
おれはやさしく
毎日まいにち　発狂するのだよ

一本の
樹にも
ながれている血がある
こゝでは血は
立ったまま眠っている

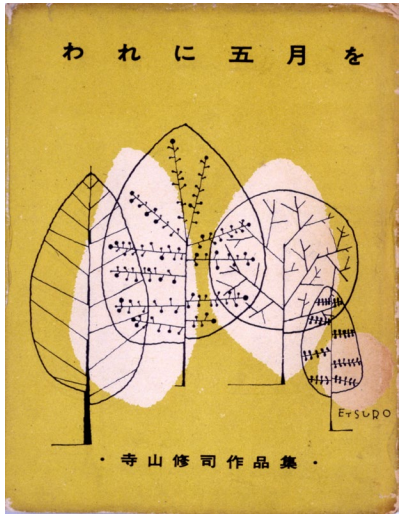
Part III—IV

鉄橋の上でだれかが
古いブルースをうたっている
男は空罐けとばす

⑫寺山修司『ブルース一九六〇』複製　©テラヤマ・ワールド

⑬寺山修司『ブルース一九六〇』複製（1960年）　©テラヤマ・ワールド

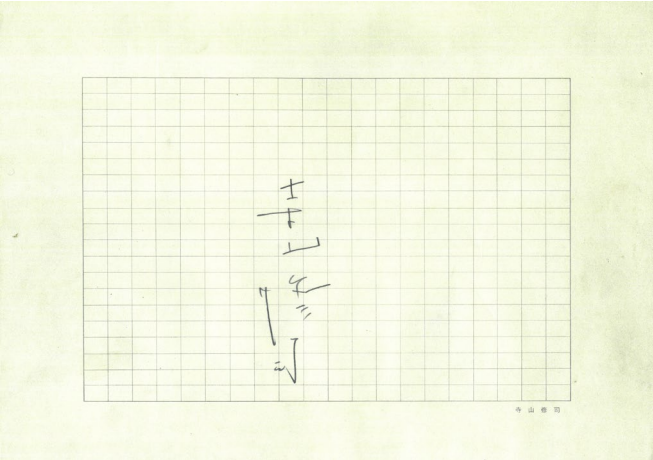
「一本の / 樹にも / ながれている血がある / こゝでは血は / 立ったまま眠っている」
戯曲『血は立ったまま眠っている』（1960年 浅利慶太演出 劇団四季）の劇中で歌われたブルースの歌詞。原稿用紙１枚目左上には、鉛筆書きで「一本の／樹にも電柱にも／ながれている血がある／こゝでは血は／立ったまま眠っている」とあり、2枚目で「電柱」が「樹」に直されている。



中井英夫の尽力で出版された第一作品集。当時、寺山は腎臓疾患のネフローゼ症候群を患い入退療養中であった。

⑮寺山修司『われに五月を』（1957年　作品社刊）

⑯寺山修司『書を捨てよ、町へ出よう』（装幀：横尾忠則 1965年 芳賀書店刊）　©ヨコオズ・サーカス



⑭寺山修司特製の原稿用紙・複製　©テラヤマ・ワールド

⑰横尾忠則《演劇実験室「天井桟敷」創立時の劇団案内用ポスター》(1967年)　©ヨコオズ・サーカス

掲示するとまたたく間に若者たちに持ち去られたという、天井桟敷設立当初の伝説のポスター

寺山修司展　―世田谷文学館コレクションにみる

表現活動の豊かな可能性を模索した寺山修司（1935～83）は、様々な芸術分野を横断することでその才能を遺憾なく発揮しました。現在も、戯曲の再演や映画上映などを通じて、若い世代を含めたファンは増え続けています。また、近年では教科書に取り上げられるなど、寺山作品は思春期の感受性豊かな若者に、時代を越えて語り続けており、その作品の普遍性が新たな読者を獲得していくのです。

寺山修司は、18歳で「短歌研究」新人賞を受賞。その後「俳句」や「短歌」などの定型詩から、自由詩へと創作活動の基盤を移し、歌謡曲の作詞や放送詩（ラジオ）へと活動ジャンルを広げました。そして、30歳を前後する1960年代後半には世田谷区下馬へ移り住み、演劇実験室「天井桟敷」を設立します。長編小説や戯曲、評論など新たな執筆活動を交えながら、演劇や映画といった芸術ジャンルへと移行していく、寺山にとって節目となる時期がこの世田谷時代でした。

寺山生誕90年にあたり、本展ではこれまで当館で収蔵してきた関連コレクションを一堂に展示します。自筆の書簡や「天井桟敷」に関する資料（原稿・台本・ポスター）など約150点の資料で、寺山修司の人物像とその活動をご紹介します。

【展示構成・ハイライト】

１．世田谷区下馬・演劇実験室「天井桟敷」の設立

新婚間もない寺山は、自宅向かいのマンションに〈家出した〉少年少女を劇団員として受け入れ、共同生活を始めます。演劇実験室「天井桟敷」の誕生です。母一人子一人で育った寺山にとって、生涯唯一のこの共同生活は「少しずつ『家庭』の内実を変えた」末の、新しい〈家〉のモデルだったのかもしれません。本章では約100点の関連資料を通じて、寺山修司の演劇活動をご紹介します。

２．手紙魔・寺山修司

高校時代から俳句や短歌を手掛けた寺山は、読者の心を虜にするような饒舌な語りかけを得意としました。短いフレーズで鮮烈に記憶に残る寺山の言葉は、知人へ宛てた手紙からも読みとれます。筋金入りの手紙魔と称される寺山ですが、本章では特に20代前半期の自筆書簡約40点を展示し、寺山修司の人物像に迫ります。

【会期】２０２４年１０月５日(土)～２０２５年３月３０日(日)　＊会期途中に整備休館あり
【開館時間】１０：００～１８：００（入場とミュージアムショップは１７：３０まで）
【休館日】毎週月曜日（但、月曜が祝休日の場合は開館し、翌平日休館）、年末年始（１２月２９日～１月３日）、館内整備期間（３月１０日～１８日）
【会場】世田谷文学館　東京都世田谷区南烏山1-10-10　03-5374-9111　https//www.setabun.or.jp 京王線「芦花公園駅」南口より徒歩5分
【主催】世田谷区、公益財団法人せたがや文化財団　世田谷文学館
【後援】世田谷区教育委員会
【協力】(株)テラヤマ・ワールド
【入場料】一般200円（160円）/高校･大学生150円（120円）/65歳以上､小･中学生、障害者手帳をお持ちの方100円（80円）

※（）内は20名以上の団体利用や「せたがやアーツカード」等の各種割引料金です
※各種割引については、手帳など証明できるものをお持ちください
※障害者手帳をお持ちの方で大学生以下は無料になります
※障害者手帳をお持ちの方の介添え者（1名まで）は無料になります
※10月5日（土）は60歳以上入場無料、11月8日（金）は65歳以上入場無料

＊同時期開催企画展
漫画家・森薫と入江亜季展 ―ペン先が描く緻密なる世界―
2024年11月2日［土］～2025年2月24日［月・祝］

世田谷文学館　学芸部　寺山修司展担当
東京都世田谷区南烏山１－１０－１０　webmaster@setabun.net
電話０３－５３７４－９１１１　ＦＡＸ０３－５３７４－９１２０